

臨時職夫を使役する製鐵所當局としては、多半色々の意味に於て問題の焦點となつてゐた指定職夫丈けでも此際解決せんとする努力の顯れであることは無慮のことながら、軍需インフレ景氣の將來に對しては雖しも其の見通しは容易でないのであるから、民間會社となつた製鐵所が一舉に四千人の職工定員を増加せんとする大英斷の取行には、夫れ相應に事業經營上の確信がなければならぬこと勿論であらう。

今茲に製鐵所に於ける臨時職夫の異動數に關する詳細なる統計はないけれども、從來臨時職夫の最高記録とせられた大正四年の一萬一千人や今回の一萬四千人の如きはもとより標準にはならないが、不況時に於ても五千人を下つたことは恐らくないので先づこの二十年間に於ける臨時職夫使役數を根據として四千人程度の職工増員は、擴張に擴張を重ねた八幡製鐵所事業の現状に於ては寧

ろ大事を採つてゐるのであつて何等の不安なしと謂ふも過言でなからうと思ふ。

最後に去る六月六日第十六回懇談會席上に於て製鐵所總務部長磯谷元亨氏が本問題に對して始めてなした言明は最も本案の参考となるので其の要旨を左に附記する。

○昭和十年六月六日 第十六回製鐵所懇談會

席上に於ける磯谷總務部長の言明要旨

懇談會として職夫の問題を取扱ふ事は其の性質が異なるので困るのであるが、多少考へて居ることもあるので答辯と言ふ意味でなしに私の考へを述べて置く。

職夫に對する諸君のお話には我々も尤もと思ふ事も少くないのであるが、實所の様な大工場に於て是に世の景氣、不景氣に直結甚大な影響を受ける製鐵業としては、この制度のあるは實際上已む